
さくらんぼ

綾未玲 奏音♪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さくらんぼ

【Nコード】

N6536P

【作者名】

綾未玲 奏音♪

【あらすじ】

中学生の女の子の恋の話です。季節外れのタイトルですみません。

夏休みに入った時から、じょじょに感じていたことだった。
わたしは彼が好きだ。

初めて話したとき、彼は見事にわたしの好きなタイプと一致していた。

頼れて、かつこよくて、言い方は少し上から目線。

そんな彼に、わたしが想いをよせていたのはまちがいなかった。

みんなはあまり彼を見ようとしないうちに、わたしはいつも彼を見ていた。

わたしは、気づかないうちに彼に恋をしていたんだ……。

??

そんなある日……。部活をしていた時のこと。

「ねえ、ゆりなちゃんって好きな人いるの？」

同じ学年で同じ部活で同じクラリネットパートの美代香ちゃんが聞いてきた。

わたしは白河ゆりな。しらかわ 中学校一年生の女子です。

美代香ちゃんは目をらんらんと輝かせてこっちを見ている。

「いるけど……。」

言ってしまったからやばい、と思った。

美代香ちゃんに言ったら、白状するまで逃げられない……。

案の定、美代香ちゃんが肩をつかんできた。

「だ・あ・れ？」

わたしはしばらく美代香ちゃんの顔を見てから、クラリネットを吹きはじめた。

「無視しないでよ、誰？ 将介？」しょうすけ

ピーー！

耳につきささるような、わたしのクラリネットから発されたリード

ミスの音。

わたしは彼の名前を言い当てられてすごく動揺した。

そう、彼の名前は、将介というのだ。

しかも、将介も同じ部活……。トランペットを吹いている。

うしろを振り向けば、本人がそこにいるのだ。

わたしはクラリネットから口を外し、その動揺をまったく表に出さないように苦労しながら言った。

「ありえない、ありえない。」

「えーっ！　なんで？　絶対将介だと思った！」

「逆にこっちが『なんで？』だよ。それより、声大きすぎ。」

わたしは美代香ちゃんに言った。それを聞くと、美代香ちゃんはやりと笑った。

「それは、ゆりなちゃんがいつも将介を見てるから！　話してるとき、うれしそうだし。」

確かに……。わたしは将介と話しているとうれしい。もっとしゃべっていたと思う。

最初の頃は、それが恋だなんて全然思っていなかった。

でも、友達から「知ってる？　勝田将介って、好きな人いるんだって。」と教えられたとき、ショックを受けたんだ。

そして気づいた。

わたしは、将介が好き。

はじめて「白河」と呼ばれた時にすっごくうれしかったのも、どこか上から目線なものの言い方に腹がたたないのも、自然に将介を目で追ってしまうのも、全部恋だったんだって。

だからこそわたしは、この想いを胸の奥に秘めて大切に大切にしてください。

ここでもばらすわけにはいかない。

わたしはもう一度否定した。

「だから違うって。」

「じゃあ、ヒントだけ！」

美代香ちゃんはなおも言い寄ってくる。わたしはため息を一つつくと、ヒントを言った。

「男です。」

「そんなヒントいらないよ！ わかってるし！」

わたしたちは笑いあうと楽譜に目をやった。

アイコンタクトをかわし、もらったばかりの曲を一緒に吹く。

うしろから聞こえるトランペットの音に耳をすませながら……。

帰り道。

美代香ちゃんが、友達しいなの椎奈ちゃんに、何やら話していた。

塾だからさっさと帰ろうと思っていると、美代香ちゃんと椎奈ちゃんが呼び止めてきた。

「ゆーりーなちゃん。」

その声はやけに高かったので嫌な予感がした。

おそるおそる振り返ると、満面の笑みの二人……。

「美代から聞いちゃったあ！ ね、教えてよー！」

「なにを？」

「好きな人！」

わたしは美代香ちゃんをちらつと見る。美代香ちゃんは悪びれた様子もなく、ただわたしの答えを待っているだけだ。

「はい、ではズバリ、将介ですか？」

「……。」

今度は答えられない。「ヒントだけでもいい？」と聞いたら即座に却下された。

「無理。将介ですか？」

「だから……。」

言えなくなつて立ち止まっていると、わたしたちの横を先輩たちが次々とすりぬけてゆく。

時計を見ると、五時四十五分……。

「ねえ、わたし塾があるんだけど……。」

「さつさと『はい、そうです』って言って帰ればいいじゃん！はやく、将介ですか？」

わたしは最後の最後まで迷って、塾を優先してしまった……。

「はい。」

そして逃げ帰る……。少し疲れて歩き出したとき、わたしは重大なことに気付いた。

（これから……しゃべれないじゃん！）

わたしは自分の考えの浅さに頭をぼかぼかたたきたくなった。

しゃべったとしても、美代香ちゃんと椎奈ちゃんはきっとからかってくる。

美代香ちゃんも椎奈ちゃんも悪い人じゃないけど、そういうからかいは激しい。

だからわたしは決めた。

好きな人をつくる。

表向きの好きな人を、空想で。

そして心の中で将介を想う……。

??

「ゆりなちゃんは、本当は誰が好きなの？」

「えっ、将介だよ？」

わたしはある日、美代香ちゃんに思い切り言ってしまった。

もう言い逃れはできない。わたしはやっぱり好きな人をつくることに決めた。

せめて、クリスマスまでに。

それもだめなら、二年生の春までに。

すべてを決めて、この想いはもう一度心の中にしまおうんだ。

??

一つの茎に、一つのさくらんぼの実がなっているだけでもいい。

やがて二つになれることを夢見て、今は片想いでいいんだ。

「おはよう」「ありがとう」「じゃあね」……

ありふれた言葉の中に、一つの想いがつまってる。

今は言えないけれど、いつか言いたい。

わたしの想いの風が、キミのさくらんぼを揺らせるまでになったら。

「……好きです……」

（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。

これは、実話をもとにしたフィクション……なんてかつこいいこと
言えませんが、一応実体験となっています。

ゆりなの想いに少しでも共感してくれたらうれしいです。

わかりづらい表現があるかもしれないんですが……ごめんなさい。

これからは連載小説に力を入れてがんばります☆

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6536p/>

さくらんぼ

2011年11月11日20時19分発行